

飛躍する「地域に根差す病院」

⑥⑥ 川崎幸病院 (神奈川県川崎市)



川崎市は、救急車の全搬送数中、現場滞在時間が30分以上かかった事案の占める割合が、政令指定都市で2007年から3年連続ワースト1だった。川崎幸病院は4月、そんな同市が公募した「重症患者救急対応病院」に指定された。受け入れ先のない重症患者を必ず受け入れる最後の砦である。

病院が目指すのは「医学的根拠に基づく高度な医療」「患者主体の医療」「地域に密着した医療」。この三つの理念の下、1973年の開設当初から地域で必要とされた救急・急性期医療の機能を強

化・充実させてきた。90年代初めには「救急車を断らない医療」を掲げ、98年に一般外来を分離独立させて川崎幸クリニックを開院。病院は救急・急性期医療に特化した。

90年代後半から救急車の受け入れ台数が増加する一方、建物が老朽化、狭隘化^{きょうあい}してきたことから、今年6月、同じ幸区内からJR川崎駅西口近くの再開発地区に新築・移転した。救急車の受け入れ台数は移転前の11年度が約6600台だったが、「移転後の12年度は8000台以上を見込んでいます。市内トップとなる目標の1万台は13年度には達成で



きそうです」と経営企画室の植田宏幸課長。

新病院は11階建てで、326床。旧病院と比べて敷地面積で約1.5倍、延べ床面積で約4倍となった。機能面での特徴は「センターコンプレックス」である。治療センターの構成は、10階は消化器病センター、9階は脳血管センターと泌尿器レーザー治療センター、8階は心臓病センター、7階は大動脈センター、1階は放射線治療センターとなっている。救急患者に関しては2階の救命・総合診療部で救急初期診療を行った上で、専門医療のセンターで集中ケアをする効率的な治療体制を取っている。

救急・総合診療部では新病院で新たに設けた三つの救命処置室、320列ハイスペックCT、経過観察や点滴処理を行う14床のホールディングルームなどを備え、専任のチームが診療に当たる。また、新病院では「地域の災害医療の中心となる病院」を目指し、免震構造や自家発電設備、トリアージスペースを設けている。

2階の診察受付とは別に、1階正面玄関に総合案内(コンシェルジュ)を設け、接客業務に長けた女性スタッフが対応している。医療やハードばかりでなく、ソフトにも心配りがうかがえる。